

国民の7割超がワクチン接種を完了し、12歳未満の子どもの接種も、来年2月から開始される予定だ。「子供に接種を勧めるのか」判断を迷っている人も多いのでは。ここでは厚生労働省がホームページで公開している最新の情報やデータから、新型コロナワクチンの安全性について考えてみたい。

お子さんやお孫さんにワクチンを勧める前に

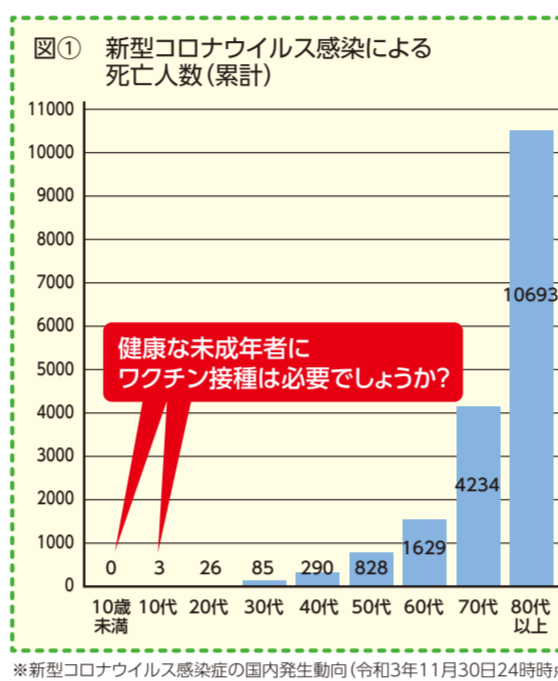
厚労省ホームページから「未成年接種」について考える

未成年者のワクチン接種後重篤者296人・後遺症6人・死亡者5人

もも重篤化する可能性がある。と発言してきたが、実際は感染してもほとんどが軽症で済んでいる。未成年者にワクチンが必要ないことは厚労省のデータが証明していると言えらる。

この状況を招いた最大の要因は、国や自治体が躍起になって広めた「周りの人のために接種すべき」というスローガンではないだろうか。「思いやりワクチン」「親孝行ワクチン」「大切な人を守るために」等のCMをよく目にした。この接種推進CMによって、たとえ自分自身に必要なくても、子どもや若者も「家族や会社や社会のために接種すべき」という考え方が広く浸透し、同調圧力が生まれたと考えられる。

しかしその目的のために、子どもや若者に自らの命や健康を賭けさせること自体がそもそも非論議ではないだろうか。大阪府泉大津市の南出市長は、大阪府立大学の井上正康名誉教授(分子病態学)から教示を受け、当初からこのような事態を想定していたため、若年層の接種に慎重な姿勢を示してきた。今後このような自治体も増えてくるかもしれない。

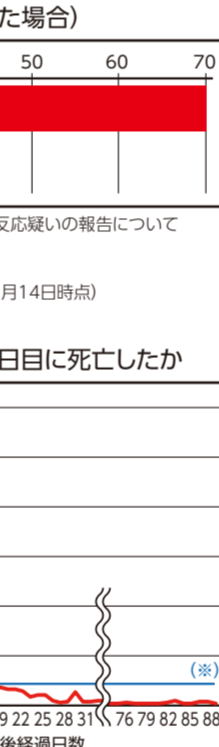


図① 新型コロナウイルス感染による死亡人数(累計) ※新型コロナウイルス感染症の国内発生動向(令和3年11月30日24時時点)

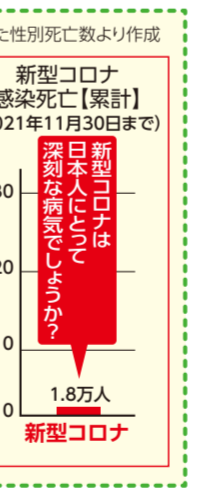
ワクチン接種と1300人超の死亡は本当に関係ない?

未成年者にとって有害なもの、大人にとっても有害な可能性がある。事実、コロナワクチン接種後の死亡者の中で、医師がワクチンの影響を疑って厚労省に報告した事例が、11月26日時点で1387人(ファイザー製1331人・モデルナ製56人)に達している。しかしワクチン接種会場で突然死亡した場合も含めて、厚労省は一人として因果関係を認めない。つまり、厚労省のホームページに記載されている通り「接種が原因で多くの方が亡くなった」という

「これはありせん」という見解だ。そうだとすると、死亡した人たちはワクチンと関係なく、その時たまたま何かの病気で亡くなったことになる。しかし、それではなぜコロナワクチン接種後にたまたま大勢の人が死亡するの、インフルエンザワクチンでは、それが少ないのだろうか(図②)。その理由は「たまたまの死亡」ではないからと考えるのが普通ではないだろうか。そう考えると、コロナワクチンの接種そのものが原因で多くの方が亡くなったという



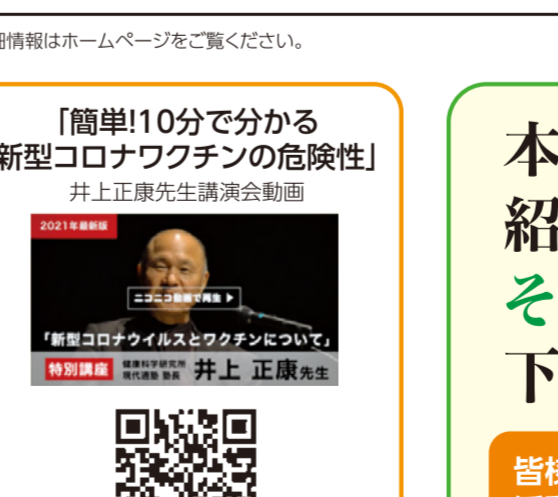
図② ワクチンの接種後死亡者数(1000万回接種した場合) ※厚生労働省HP:令和元年シーズンのインフルエンザワクチン接種後の副反応疑いの報告について(接種回数:56,496,152回、死亡6人) ※新型コロナウイルスにおける副反応疑い報告の状況について(ファイザー・モデルナ推奨接種回数:194,827,854回、死者1368人/11月14日時点)



図③ ワクチン接種後、何日目に死亡したか ※厚生労働省HP:新型コロナウイルス接種後の死亡として報告された事例の概要(令和3年11月26日)より作成(接種当日(0日)の死亡者数は、接種後の経過時間が短いため1日に含めて集計)

また、ワクチンが生殖機能に及ぼす影響についても注意が必要だ。ファイザー社が厚労省に提出している「薬物動態試験の概要文」には、ワクチンの成分が確実に卵巣や精巣自体にも集まる動物実験のデータがある。厚労省ホームページには「不妊にならない」との記載は「言もなく、ただ、現時点では、ワクチン接種が不妊の原因になるとい科学的な根拠は報告されていません。」と書いてあるだけだ。

この点について前出の井上正康大阪府立大学名誉教授は「ワクチン接種は始まったばかりであり、不妊の根拠が報告されるとしたら、これから数年、数十年後のことである。何らかの異常



図④ ※厚生労働省HP:死因別単分類別みた性別死亡数より作成

厚労省が「誤情報」を広めてしまったことも大きな問題だ。厚労省の資料によると、ワクチン接種後死亡者1368人(11月14日時点)のうち1360人つまり99%以上のケースで因果関係が「不明」とされている。つまり接種が原因で多くの人が死亡したかどうかを厚労省も分からない。

「この誤情報によって国民に何の警戒もなくワクチンを接種させ、その結果子どもや若者も多くの人が亡くなった可能性を考えると、厚労省の責任も問われかねないのではないだろうか。」

「ワクチン接種に関しては、この他にも心筋炎の症例が多かったり、不正出血や月経不順を訴える女性が多かったり、3回目のワクチン接種が必要になったり、厚労省も製薬会社も想定していなかったことが数ヶ月の間いくつも起こっている。その理由は、今回のワクチンが人体に用いるのが初めてであり、有効性も安全性も2023年5月まで不明(ファイザー)の「臨床試験中の実験薬」だからだ。それは人体への長期的な影響が誰にも予測できないことを意味する。

「長期の安全性について特段の不安がある」ということはありませんが、「と断言している。ところが事実とは違っていて、厚労省の「審議結果報告書」には「接種後長期の十分な安全性データが得られていない」という「留意が必要である。」と記載されている。ワクチンの安全性を確認する手続きを特例承認で省略してしまったため、厚労省も今後数年に渡って何が起るか分からないまま接種を推進しているのが現状だ。

「これはありせん」という見解だ。そうだとすると、死亡した人たちはワクチンと関係なく、その時たまたま何かの病気で亡くなったことになる。しかし、それではなぜコロナワクチン接種後にたまたま大勢の人が死亡するの、インフルエンザワクチンでは、それが少ないのだろうか(図②)。その理由は「たまたまの死亡」ではないからと考えるのが普通ではないだろうか。そう考えると、コロナワクチンの接種そのものが原因で多くの方が亡くなったという

図④ ※厚生労働省HP:死因別単分類別みた性別死亡数より作成